

第2編 地域における環境づくり

第1節 大津地域 ～環境にやさしい循環型の暮らしづくり～

地域の概況、課題、環境づくりの方向

大津地域は、人口約33万人を有する滋賀県随一の都市的地域であるとともに、大津京などをはじめとする古い歴史を持ち、活発な都市活動と歴史文化環境が共存する地域です。その地形は、背後の山並みから前方の湖まで階段状の地形が特徴的に広がっています。このため、河川は延長が短く、水量が少ない特性を有しています。

その中で、人口増加と都市開発に伴い、市街地周辺部を中心として、自然地が減少し、ごみの増加など大量生産・大量消費・大量廃棄型の消費スタイルに伴う環境負荷の高まりや、全域に鉄道網が発達しているものの、鉄道へのアクセスや地域内での移動が不便なことから、自動車への依存が強く、交通渋滞や排出ガス、エネルギー消費の増加などに伴う環境負荷の高まりといった環境問題を抱えています。

このような状況の中、地域の環境を環境負荷の小さな循環型のものに変えていくことを目標に環境づくりを進めており、古くから暮らす住民、新たに移り住んできた人、ここで働き・学ぶ人、地域で活動する事業者、行政等が協働し、環境を大切にすることと行動の輪を広げていくことにより実現させていきます。

取組

1 流域アジェンダ策定・推進事業

〈琵琶湖再生課〉

大津流域においては、マザーレイク21計画に基づき、「柳川を愛する会」等により「流域アジェンダ（流域行動計画）」が策定されました。（平成15年度）

今後は、「流域アジェンダ」の実践活動に対して支援を行うとともに、琵琶湖流域ネットワーク委員会への支援を通じて、大津流域内および流域を越えたネットワークを構築し、取組の輪を広げることを目指しています。

柳川を愛する会

（概要）

昭和62年(1987年)に河川愛護団体として設立され、柳川の浄化と保全に取り組んでいます。

（目標）

今まで以上に柳川を愛してもらい、子供から大人まですべての世代の保全意識の高揚を図り、柳川および琵琶湖の保全を目指します。

（結果）

柳川生きもの探検や魚つかみ体験、美化活動等の実施、瓦版の発行

（結果の評価）

川への親しみを地域の住民や子どもたちにある程度もってもらうことができたが、上流・中流・下流間の交流を一層図る必要があります。

（今後の展開）

今後は上・中流域に対して美化活動の参加の呼びかけを行ったり、近隣小・中学校と連携して未来を担う子供たちに生物多様性に富んだ河川であることを知ってもらうことにより今まで以上に柳川を愛してもらい、子供から大人まですべての世代の保全意識の高揚を目指します。

2 「大津の森の木で家を建てよう！」プロジェクト

〈大津林業事務所〉

（概要）

大津の森の木で家を建てよう！プロジェクトは、住まい手よし、つくり手よし、環境よしの三方よしの住まいづくりをコンセプトに、森林所有者から住まい手まで関係するすべての業種の人たちが集まり、顔の見える関係を大事にしながら、木の伐採から利用まで、一連の流れを通じて地元の山の木を利用することの大切さをみんなで考え、元気な地域づくりを目指し活動しています。これまでに大津産の木の家が3棟誕生しました。

また当プロジェクトでは、家づくり以外にも木材の様々な活用法を検討しています。平成17年度より大津市内の中学校で、大津産木材を技術科授業の

教材に使用してもらい、メンバーによる「木材・木工の授業」と「森林環境の授業」を内容とする「教材提供事業」を始めました。

構成メンバー：森林所有者・森林組合・素材生産業者・製材業者・工務店・設計士・大津市・大津林業事務所

(目標)

- (1) 教材が地元の山で育った木からできていることを生徒が意識することで、木への愛着を深め制作意欲を高める。
- (2) 大工さん等ものづくりの専門家から、直接、道具や材料への思いや仕事に対する気持ちを学ぶとともに、物を大切にすることを育む。
- (3) 専門の外部講師の話聞くことで山の環境や家づくり、また暮らし方に関わる問題に関心を広げる。

(結果)

平成17年度から平成18年度にかけて、これまでに二つの市内中学校（瀬田中学校、青山中学校）で教材提供事業を実施し、地元産の木を使用した木工体験を通じて、森の役割や森の現状と手入れをすることの大切さ、森を守ることは琵琶湖の環境を守ること、木の家は「まちの森」、木の文化の話など森林環境に関わる授業を行いました。

(結果の評価)

生徒たちから「木を伐ると自然破壊になると思っていたけど、また植えるから自然破壊にならないことがわかった」「木を大切に使うことで森の環境が良くなることがわかった」「森を大切にすることで琵琶湖も守られることもわかった」「長い年月をかけて育ててきた木の家を大切に使いたいと思った」という感想が寄せられました。

こうした生徒たちの反応からプロジェクトの思いを伝えることができた実感できました。

(今後の展開)

当事業が、滋賀県環境学習支援センターの環境学習プログラムに登録されました。

(http://www.ecoloshiga.jp/C_program/program.php?id=309)

今後も、より多くの学校で実施されるように、授

業内容等検討しながら、活動を広めていきたいと考えています。そして、地元で生産された木材を積極的に利用し、地産地消のシステムづくりの検討を続けていきたいと考えています。

「大津の森の木で家を建てよう！」プロジェクトのホームページ

<http://park23.wakwak.com/~otsu-mori-p/index.html>



3 自然環境の保全に配慮した砂防事業

〈大津土木事務所〉

(目標)

工事区域内のギフチョウの卵やミヤコアオイを適地に移植して、砂防ダム建設工事に伴う影響をできる限り軽減します。

(概要)

滋賀県は、公共工事そのものが環境と共生した社会システムの構築に寄与することとなるよう、平成15年(2003年)に「滋賀県公共事業環境こだわり指針」を策定しました。砂防事業においてもこの指針に基づき、自然環境の保全に配慮した取組を実施しています。

大津市山中町（滋賀県と京都府の県境付近）地先の白川支川では、土石流から住民の生命や財産を守るため、砂防ダムの建設を進めています。

この工事に先立って周辺の自然環境を調査したところ、砂防ダム建設予定地においてギフチョウとミヤコアオイの生息が確認されました。このため、滋賀県の「生物環境アドバイザー制度」に基づき、専門家の意見を聞きながら保全対策について検討を行ってきました。その結果、工事着手前にギフチョウの卵やミヤコアオイを適地に移植することとし、平成14年(2002年)から順次移植に取り組んでいます。平成18年度は、近隣の小学校の協力を得て、環境学習の一環として小学生によるミヤコアオイの移植を行いました。

（結果）

モニタリング調査の結果、ミヤコアオイについては移植後も順調に生育していることが確認できました。

（結果の評価）

移植したミヤコアオイの生育状況から、ある程度ギフチョウの生息環境を保全することができたものと考えられます。

（今後の展開）

引き続き近隣の小学校と連携してモニタリング調査などを行って、ギフチョウやミヤコアオイの生息状況を調査し、生息環境の保全に努めます。



工事によって消失するミヤコアオイの移植
（地元の子供たちによる移植作業）



ギフチョウ（希少種：ミヤコアオイを餌として生息）

第2節 湖南地域 ～ふるさとの自然と水をよみがえらせよう～

〈南部振興局〉

地域の概況、課題、環境づくりの方向

湖南地域は、琵琶湖の東南部に位置し、野洲川や草津川などで形成された平野部と湖南アルプス山系から構成された面積約207km²に及ぶ地域です。

地域をJR琵琶湖線や国道1・8号、名神高速道路が縦断しており、交通の利便性から京阪神のベッドタウンとして都市化が著しく進行し、県内の人口急増地域であり、地域の人口は307千人（H19.6現在推計人口）と県人口の22.0%を占めています。

また、電機産業や情報通信機械産業など700社を超える工場が集積し、滋賀県工業の中心地となって

いる一方で、古来より栄えた田園地帯は、近江米の主要な産地を形成するとともに、都市近郊という立地条件を生かした野菜や花卉の生産も盛んに行われています。

このような中、環境の悪化が懸念されており、快適さや健康、「いやし」や「なごみ」を求める機運が高まり、ふるさとの自然や水を取り戻し、「ゆとり」や「やすらぎ」を享受できる心安らぐ景観の保全を図る必要があります。

このため、次の視点から環境づくりの取組を進めることとしています。

1 流域ぐるみでの水環境保全体制の整備

身近な水環境保全の取組が地域内に広がるよう、広く地域住民や事業者、農林漁業者等の参加を得て、環境保全グループとの連携、ネットワーク化を図っていきます。

2 湖南グリーンパートナーシップの構築

湖南地域では、研究機関や理工系大学が集積し、環境問題に取り組むNPO活動も活発になっており、それぞれの持ち味が活かせるような元気のでるパートナーシップ（協働）を進めながら、自然との共生・循環型社会の構築を図っていきます。

3 新たな都市ライフスタイルの確立

湖南地域では、今後も都市開発が進むことが予想され、環境に配慮した街づくりの方策や個人の各世帯が取り組む環境負荷軽減のための新たな生活の仕方を検討していきます。

取組

1 水環境の保全

琵琶湖南湖の水質保全を図るため、「マザーレイク21計画」「琵琶湖水質保全行動計画」に基づき、赤野井湾や木浜内湖の底泥浚渫などの直接浄化を行うとともに、家棟川、赤野井湾流入河川および葉山川の流域を対象とした「湖南流域環境保全協議会」を設置して流域単位での水環境保全に取り組んでいます。

また、農業の生産性も考えながら環境に調和した農業の推進と琵琶湖の環境保全を進めるため、「湖南地域みずすまし協議会」において、農村地域の水質、生態系、景観の保全に取り組んでいます。

（1）南湖の水質改善〈河川砂防課〉

（概要）

「マザーレイク21計画」「琵琶湖水質保全行動計画（H18完了）」に基づき、以下の直接浄化対策を行っています。浄化対策の実施に際しては、地元住民との協働でワークショップや各種現場見学会の開催などの活動を行っています。

赤野井湾の浄化対策	浚渫A=63.4ha完了 流入河川対策 守山川浄化施設(植生浄化、一次貯留池)整備完了 天神川・金田井川浄化施設(一次貯留池)整備中 山賀川・境川浄化施設(沈殿池)設計中 法竜川・三反田川調査検討中
木の浜内湖の浄化対策	浚渫A=16.5ha(内済み13.9ha)H13~H19実施
平湖・柳平湖の浄化対策	浚渫A=11.5ha完了 導水施設検討中
守山地区湖岸自然再生	全体計画L=1,500m(内済みL=1,010m)

（目標）

2010年までに昭和40年代前半レベルの流入負荷量まで削減します。

（結果）

各事業地で毎年水質等のモニタリング調査を実施中です。

（結果の評価）

「琵琶湖水質保全対策行動計画」の最終年である平成18年度に総合的な評価を行いました。現在も継続してモニタリングを行っています。

（今後の展開）

「マザーレイク21」に掲げる目標を達成するため、現在進めている河川浄化対策を今後も継続して実施します。

（2）流域アジェンダ実践活動事業

〈環境森林整備課〉

（概要）

健全な姿で琵琶湖を次世代に継承し、県民総ぐるみによる琵琶湖環境保全を進めるため、「マザーレイク21計画」に基づいた流域単位での水環境保全の取組として、平成13年(2001年)8月に、環境NPO、農林漁業関係団体、企業の代表者、学生等による「湖南流域環境保全協議会」が発足し、これまで理事会を中心に研修会や環境学習会を行ってきました。

また、協議会では平成16年(2004年)に「行動指針」を採択し、今後はこの行動指針をもとに、各地域で実践活動に取り組むとともに、管内で活動する各種団体、個人、NPOなどに会員としての参加を呼びかけ、ネットワークづくりを推進することとしてい

ます。

（目標）

地域環境活動のネットワーク化を図り、行動指針に基づく行動計画が実践されるよう取り組みます。

（結果）

情報誌の発行やシンポジウムの開催による広報活動や研修活動あるいは河川見て歩きなどの親子環境学習会やビオトープ体験学習活動などを行いました。

（結果の評価）

環境学習会などの事業はNPOとの協働により取り組み、参加者も確保できました。

（今後の展開）

環境NPOや住民団体への加入推進や地域活動との連携を進めネットワーク化するとともに、行動指針による取組が行われるよう流域ごとの活動を進めます。



「河川見て歩き」津田江内湖



「野洲・あやめ浜環境ウォッチング」

（3）湖南地域みずすまし推進協議会

〈田園振興課〉

（概要）

「みずすまし構想」の趣旨に基づき、設立後9年

を迎えた湖南地域みずすまし推進協議会では、自然と仲良く、多くの生物と共存できる田園地域の実現を目指して、農家や土地改良区、農協、地域住民、行政が協働して環境保全活動に取り組んでいます。

平成18年度は、昨年を引き続き、非農家をも含めた多くの人達とのネットワークづくりを進めるため、消費生活グループとの交流、地域ぐるみのイベントや生き物観察会の開催、小学生を対象とした田園地域の環境学習の一環としての出前講座やかんがい施設の見学会のほか、琵琶湖から田んぼに魚が遡上できる『魚のゆりかご水田』などの活動を展開しました。

（目標）

目標達成度を計る指標を、観察会の実施回数とみずすまし活動参加者数におき、観察会を16回開催することと、みずすまし活動への参加者数600人以上を目標としました。

（結果）

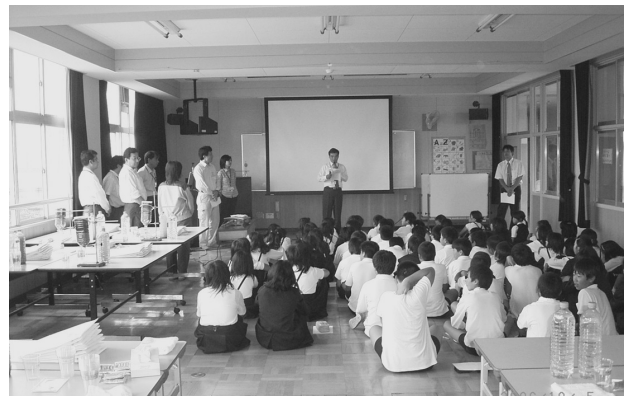
観察会は24回開催し、参加者数は1,126人を達成することができました。

（結果の評価）

『魚のゆりかご水田』の取組がかなりの部分をしましたが、魚と水田との関わりを通して、地域住民や子供たちに環境意識の向上を図ることができ好評でした。

（今後の展開）

平成19年度から「世代をつなぐ農村まるごと保全向上対策」が始まる活動組織と連携し、みずすましの取組の拡大と活性化が図れるように、これまでの活動を継続していきます。



小学校での出前講座



『ゆりかご水田』観察会

2 田園空間博物館づくり〈田園振興課〉

(概要)

野洲川下流地域に広がる田園地帯には、縄文時代から現代に至るまで野洲川の恵みに感謝し、自然と闘い、様々な文化を生み出しながら暮らしてきた先人の多くの足跡が、有形無形の地域資源として残されています。

なかでも、農業用水路、ため池、クリークなどの水に関連した施設と、そこに住む生物が一体となって醸し出す魅力的な田園空間の保全への期待が高まっています。

これらの貴重な資源を風化させることなく、そこに住む人々が野洲川との共生の歴史を守り、都市住民との交流の中で共に学び、新たな地域づくりの核とするために、地域の情報発信基地である田園センターや田園散策の道、展示施設など（農村景観や伝統農業施設の復元、史跡等の案内板等）を整備し、野洲川下流地域をまるごと田園空間博物館とした地域づくりを進めています。

(目標)

田園センターを開設し、地域住民活動やコミュニティーの母体となる地域住民組織を立ちあげることとしました。

(結果)

平成18年(2006年)10月に「田園センター」の開館ができ、平成19年(2007年)4月に地域住民活動の核「でんくうの会」が発足しました。

(結果の評価)

「でんくうの会」の発足により、地域資源の伝承や都市住民との交流を、講座開設などにより具体化することができました。

(今後の展開)

ミニ講座や、ミニツアー、体験イベント、あおぞら自由市など様々な活動の輪を拡げていけるよう支援します。



「田園センター」開館

3 こなん環境シンポジウムの開催

〈環境森林整備課〉

(概要)

琵琶湖の現状と課題を認識し、マザーレイク21計画に基づく活動を検証することによって、今後の環境保全のあり方を情報発信するとともに、湖南・甲賀地域の環境団体が連携して、参加者の関心と理解を深めることを目的にシンポジウムを開催します。

(今後の展開)

小学生から高齢者までが一緒に環境保全に取り組めるよう、「湖南流域環境保全協議会、鹿深の里甲賀流域環境保全協議会」をサポートし、湖南地域6市との連携をさらに強化していきます。